欲望メギ〇ラル
成人向け

「さあさあ!! この女!! 見た目は美少女そのものだが・・・」
夜のスラム街の外れでそれは行われていた・・・
「中身は化け物!! 齢100年を軽く超え、一切歳をとらない正真正銘の悪魔!!」
追放されたアイ○は年をとらない化け物として
そして夜の「見世物」として男たちに使われていたのだ。
「そんな悪魔を我々の精液で浄化しよう!! そう!! 精液で!!」
「今日もたっぷり可愛がってやるからな・・・へへへ・・・」
男はたちそういうとアイ○を抱きかかえ、胸をはだけさせスカートを捲り上げた・・・

「へへ・・・ほんと・・・可愛い顔してんな・・・」
男を見上げるアイ⊙に視線を送り男がにやりと笑う。
「じゃあ早速この純白のおぱんつから・・・」
男の肉棒がアイ⊙の下着の上にあてがわれる。
「うう・・・また・・・下着を使って・・・」
悔しそうにアイ⊙が唇をかむ。
「へへ・・・これが気持ちいいんだよぉ～マニア受けもするしな！！」
男が鼻息を荒げながら腰を振り始める・・・

「ふぅ・・・はぁ・・ううう！！」
しばらく腰を振った後、男は勢いよくその精液をアイ⊙の下着の上にぶちまけていった。
「おお！！　すげえ・・・パンツに精液・・・」
「わりとアリだな！！　こういうの・・・」
観客たちも満足気な反応を示している。
「やだぁ・・・き・・・汚い・・・」
あっというまにアイ⊙の下着が精液で汚されていく・・・

「うう・・・また・・・べとべと・・・」
悔しそうに男を見上げるアイ⊙。
「いい顔してんな・・・相変わらずそそらせてくれるぜ・・・」
男はそう言うと股間から肉棒を取り出し、アイ⊙の頬にぺちぺちと当て始めた・・・
「あんっ!! やめて・・・」
次に何をされるのかはわかっている・・・
「さっさと咥えろよ? お客様も待ってんだぞ?」
逆らったところで殴られるだけ・・・
アイ⊙の口の中に男の肉棒が入り込んでいく・・・
べと…べとっ…
ベトッ
ドクン
ドクン
ドロッ
ベトッ
ベトッ

「おう!! もう口でするのも慣れっこだな!!」
臭い肉棒が口の中でドクンドクンと脈を打つ。
「(ひどい・・・いつもいつもこうやって・・・)」
慣れるはずのない行為に顔をしかめるアイ⊙。
「さあ皆さん!! そろそろ下の口にもずぶずぶっと・・・」
男の手がアイ⊙の下着を横にずらしていく・・・
「(いやぁ・・・また・・・また・・・)」
がくがくと震えるアイ⊙の性器に勃起した肉棒があてがわれた・・・

「(うう・・・はいって・・・くる・・・男の人の・・・)」
ずぶずぶとアイ⊙の膣内に男の肉棒が挿入されていく。
「ふう・・・相変わらず・・・狭くて・・・〈〈・・・」
狭い膣内を大きな肉棒が突き進んでいく。
「うお・・・はぁはぁ・・・」
「ごくり・・・」
観客たちの視線もアイ⊙の下半身に集中している。
「〈〈・・・そら・・・動くぜ!!」
彼らの視線を意識しながら大げさに男が腰を降り始めた・・・
!!
ん。。。
キュプ
ん。。。
ビクッ
ズブッ
ズブッ
ビクッ

「(あああっ!! 激しい・・・今日も・・・)」
ぱんぱんと激しく男の肉体がアイ○の体とぶつかる。
「はぁはぁ・・・いいぜ!! 今日も最高に気持ちいいぜぇぇぇ!!」
男が本能のまま腰を振る。
観客たちも己の股間に手を伸ばし、勃起した肉棒をしごき出す。
「おお・・・すげえ・・・まるで獣だぜ・・・」
「滅茶苦茶気持ちよさそう・・・うっ・・・」
何人かの肉棒が限界に達し、あらかじめ渡されていた布切れに精液を放出する。
「へへ・・・皆さんも盛り上がってるぜ!! そろそろ出すぜぇぇ!!」
男はそう言うと大量の精液を膣内に放出していった・・・
ドビュ
ドビュ
チュプ
チュプ
ドプッ♥
ドプッ♥
ドプッ♥
ドプッ♥
ぱん。
ぱん。

「おら！！ 精液だぞ！！ 全部飲めよ！！」
アイ○の口内と膣内に精液が注がれていく。
「（んんっ！！ きょ・・・今日も・・・すごい量・・・）」
大量の精液があっという間にアイ○の口の中で溢れそうになる。
「（の・・・のまないと・・・息が・・・）」
仕方なく濃厚な精液を食道に流し込んでいくアイ○。
観客たちもみな精液を解き放ち、周囲が一気にイカ臭くなっていく・・・
「（うう・・・みんな・・・私の犯されているところを見て・・・）」
アイ○が男の顔を見上げる。
そこには恍惚とした表情で少女をレイプする悪魔の顔があった・・・

「(うう・・・また・・・たくさん・・・・中に・・・)」
精液が割れ目からぼたぼたと地面に向けて落ちていく。
「ふう・・・出た出た・・・」
男の肉棒がアイ○から引き抜かれていく。
「はぁはぁ・・・げほっ・・・ごほっ・・・」
びちゃびちゃとアイ○の口や性器から精液が撒き散らされる。
「では観客の皆様、追加料金を支払っていただければこちらにゲストとして・・・」
男たちが次々と名乗りを上げる。
そして何人もの男たちがアイ○の膣内に精液を注いでいく・・・
ヘヘヘ…
ベトッ
ド。
トプ
トプ
ベトッ
ドロッ
ド。
トプ
トプ
トロッ

「ふう・・・今日もよかったぜぇ・・・」
観客たちの相手もさせられたアイ⊙の全身は精液でべとべとに汚されていた。
「はぁ・・・はぁ・・・」
肩で息をしながら男たちの精液を吐き出すアイ⊙。
「さて・・・明日もしっかり稼いでくれよ・・・」
アイ⊙の体をきれいに拭きながら男たちが笑う。
「うう・・・なんとか・・・逃げないと・・・」
こうしてアイ⊙は男たちに使われる日々を過ごすのだった・・・
ほかの追放メギ⊙に救出されるその日まで・・・

「わしをどうするつもりじゃ!!」
街中で男に拉致されたベレ○。
「あいかわらずカッカしてんな・・・ヴィー○になっても変わってねえ!!」
ベレ○を連れ去った男が語りかけてくる・・・
「その言い方、き・・・貴様!! 貴様も追放メギ○・・・か・・・?」
ベレ○が男に聞き返す。
「ああ そうだぜ? あっちにいた時からてめえにはなぁ・・・」
男はそう言うと己の股間に手を伸ばした・・・

「な・・・なにを・・・それは・・・」
男がペニスを勃起させベレ○に近づく・・・
「俺は男・・・そしててめえは非力な・・・女・・・」
勃起したそれをベレ○の口元に突きつける。
「脳みそはヴィー○だからな・・・てめえの姿に興奮するのは癪だが・・・」
美少女と呼んで差し支えのないその姿が男の本能を焚きつけていく・・・
「く・・・来るな・・・来るなあっ!!」
ベレ○が叫び声をあげたその瞬間、男の肉棒がその口内に入り込んだ・・・
「へへ・・・そら!! しゃぶってもらおうかぁぁぁ!!」

「(んぐっ!! こ・・・これは小便をする器官では・・・)」
男の行為に戸惑うペレ○。
「(わ・・・わしは便所か!! ふ・・・ふざけおって・・・)」
口内の肉棒から異臭が漂ってくる・・・
「なんだ? 咥えるのは初めてか? 犯られてなかったのかよ?」
男がペレ○の髪を弄りながら言う。
「へへ・・・じゃあ舌使って先っちょをぺろぺろしてくれよ?」
男の顔が醜く歪んでいく・・・
んぐ。
キュプ
キュプ
ん。
んっ
ギシ
ギシ

ん。
キュプ。
キュプ。
ん。
ん。
ドクン
ドクン
ズ…ゆっ…
「(んん・・・し・・・舌じゃと・・・)」
男の要求に戸惑うベレ○。
「おら!! さっさとしろ!! 殴るぞ!!」
男が拳を振り上げる。
「(うう・・・こ・・・こう・・・か・・・?)」
女としての恐怖心か、ベレ○は男の要求を受け入れてしまっていた・・・
「こりゃあたっぷり借りを返せそうだぜ・・・」

んっ
んっ
チュプ
チュプ
んっ
チュプ
んっ
「(く・・・くそ・・・なぜわしがこのような輩の言いなりに・・・)」
くちゅくちゅと舌先で男のモノにご奉仕するべレ○。
「よーしよしよし!! こうやって見るとマジで可愛いじゃねえか・・・」
違和感を完全には拭えなくとも、男の本能はしっかり相手の魅力を感じていた・・・
「はぁはぁ・・・げ・・・限界だ!! 出すぞ!! 飲めよべレ○!!」
男はそう言うとべレ○の口内に大量の精液を放出し始めた・・・

ぶっ
ドピュ
ドピュ
ドピュ
ぶっ
ドピュ
ギュッ
ギュッ
「(な・・・なんじゃこの臭い液体は!!)」
舌に大量の精液が絡みつき、異様な臭気がベレ○の嗅覚を襲う。
「(こ・・・これを・・・の・・・飲むの・・・か・・・?)」
具体的にナニなのかは知らなくとも、己の肉体が、頭が拒絶している。
「おら!! 殴られてえのか!! さっさと飲め!!」
仕方なく精液を飲み干していくベレ○・・・
「(くそっ!! くそおおお!!)」

「ふう・・・意外に素直だったな・・・ソロモ○共にアク抜きでもされたか？」
精液で汚れたベレ○の顔に手を伸ばし男が言う。
「はぁ・・・はぁ・・・貴様・・・よくも・・・」
悔しそうに男を見上げるベレ○。
「お・・・おう・・・この顔・・・くそ・・・」
精液で汚れた可愛らしい顔が男の本能を刺激していく・・・
「もうこの体になっちまった以上・・・しっかり楽しまないとなあ！！」
男はそう言うとベレ○を抱きかかえた。

「貴様らどこから!! くそぉぉ・・・」
わらわらと男たちがベレ○を取り囲む。
「こいつらは追放メギ○ですらねえ・・・ただのヴィー○だぜ?」
ベレ○の背後から男がささやく。
「へえ・・・なかなか可愛い顔してるじゃねえか・・・お前は正真正銘のヴィー○男に弄ばれるのだと・・・」
「へへ・・・たっぷり可愛がってやるぜ・・・」
男たちの腕がベレ○の体に伸びていく・・・
くそっ!!
くそっ!!
ぎゅっ
ぎゅっ
へっ
へっ
へっ
スリ
スリ
スリ
スリ
スリ
ドクン
ドクン

「や・・・やめっ・・・ ああっ いたいっ!!」
男の指がベレ○の胸をつまみ上げる。
「おうおう・・・あのベレ○がこんな声をねえ・・・」
背後から男が語りかける。
「や・・・やめ・・・くそおおおっ!!」
悔しそうに叫ぶベレ○。
「へへへ・・・俺のコイツもパワーが戻ってきたぜ・・・」
男はそう言うと、己の肉棒をベレ○の下着の中に潜り込ませて行った・・・
くれっ
いたっ
ぺっ
ぺっ
ぺっ
ビクン
ビクン

「なななな・・・なんだこれはっ!!　何をする気だああっ!!」
下着の中を男の肉棒が上下し始める・・・
「はぁはぁ・・・ハハ・・・すりすり気持ちいぜ・・・」
荒い鼻息がベレ○の髪にまとわりつく。
下着の締め付けと肉体の柔らかさが男を悦ばせている。
「そんなところっ・・・あああっ!!　やめろおおっ!!」
男の気持ち悪い行為がベレ○の頭の中をかき乱していく・・・
な・・・な・・・
やめろっ!!
はぁ・・・
はぁ・・・
スリ・・・
スリ・・・
ズリッ
ズリッ

「くそぉ・・・このわしが・・・貴様らのような・・・」
悔しさに歯を食いしばるベレ⊙。
「ああ・・・いい感触だぜ・・・柔らかい肌とパンツに挟まれてよぉ・・・」
どくんどくんと男の肉棒が下着の中で脈を打つ。
「そ・・・そろそろ・・・出そう・・・だぜ・・・」
必死に射精したい欲求を抑えながら男が
「ま・・・まさかさっきわしに飲ませた液体を・・・」
ベレ⊙がそう言った瞬間、どぴゅどぴゅとその下着の中に精液が放出され始めた・・・
ハァ…
ハァ…
レロ
レロ
スリ…
スリ…
スリッ
スリッ
スリッ
スリ…

「ふう・・・出る出る♪ べレ○た～ん たっぷりおパンツの中に～」
男が気持ち悪い声を上げる。
その言葉通りべレ○の下着の中にどろどろの精液が流し込まれていく・・・
「やめろおおおっ!! 変なところに出すなあっ!!」
べレ○の下着に男の精液が染み込み、布地が一気に汚されていく。
「はぁーたまんねえぇ・・・」
べレ○の足をさすりながら男が呟く。
フゥ…
フゥ…
やめろぉ!!
やすなぁ!!
ドピュ
ドピュ

「うううぅ・・・べとべとして・・・よくも・・・」
唇を噛み、悔しそうに男をにらみつけるベレ○。
「気持ちよかったぜ・・・こりゃあメギ○体じゃ味わえない快楽だぜ・・・」
男が呼吸を整えていく。
「貴様ぁ・・・絶対に許さんぞ・・・」
ぐすぐすと鼻声でベレ○が呟く。
「ははは!! 別に許してもらいたいなんて欠片も思ってねえからよ!!」
男はそう言うとベレ○の下着の中にある己の肉棒を彼女の割れ目にあてがった・・・
うぅ
うぅ
ぶり
ぶり
はぁ
はぁ
しゅぅ…
ドロッ
ドロッ

「あああああっ!!　な・・・なんだあああっ!!!」
ずぶずぶとベレ○の中に男の肉棒が入り込んでいく・・・
「おお・・・せっま・・・てめえの心みたいな穴だな・・・」
肉棒がぎゅっと締め付けられていく・・・
「いや・・・それは撤回だ・・・いい締め付け・・・《《・・・」
男がゆっくりとベレ○の体を上下に揺らし始める・・・

「う・・・あああ・・・くうう・・・」
貫かれた女性器が少しずつ気持ちよくなっていく・・・
「はぁはぁ・・・ベレ○・・・気持ちいいぜ・・・」
ベレ○の首筋を舐め、男がさらに高まっていく・・・
「貴様なんかにい・・・ううう・・・」
下半身が男の行為に反応していき、頭の中が快楽で覆われていく・・・

「や・・・やめて・・・くれ・・・はぁ・・・はぁ・・・」
快楽に抗いながら必死に言葉をつなぐベレ○。
「へへ・・・あっちではてめえにボコられたり・・・てめえを抑えられなくて・・・」
男がはぁはぁと荒い鼻息を撒き散らしながら言う。
「俺はこっちに追放されちまったんだぜ・・・」
男が一気にその動きを激しくしていく・・・
「だったらよぉ!! 俺には権利があるはずだよなぁ!!」
男はそう言うとベレ○の膣内にどくどくと精液を注いでいった・・・
はぁ
はぁ
はっ
はっ
はぁ
はぁ
ぐっ
ぐり
ぱんっ
ずぷっ
ずぷっ
ずぷっ
ぱんっ

「あああああっ!! いやあああああっ!!」
ペレ○の膣内にすさまじい勢いで精液が注がれていく・・・
「ふう・・・はぁ・・・《《《・・・出る出る♪」
狭い膣内が大量の精液を受け止め、あふれた分が逆流して・・・
「こんなに気持ちのいい復讐ができるなんてなあ!!」
男が楽しそうに叫び、どくどくと精液を出し続ける・・・
「やめろおおおお!! くそおおおおっ!!」
ペレ○の怒声が空しく散っていく・・・
ぶっ
ぶっ
ぶっ
フゥー
フゥー
ドピュ
ドピュ
ドピュ
ドピュ
ドピュ

「はぁ・・・はぁ・・・な・・・中に・・・これは・・・」
とぷとぷと精液が地面に向けて落ちていく・・・
「ヴィー⊙はこうやって子孫を作るんだぜ？　てめえの中に俺の子供をぶちまけたのさ！！」
げらげらと楽しそうに男が笑う。
「ま、俺の子供ができるかこいつらのガキを孕むかはわからねえけどな！！」
男はそう言うとベレ⊙を地面に突き飛ばした。
「い・・・いやあああっ！！」
倒れたベレ⊙に男たちが群がっていく・・・

「あぅ・・・あああ・・・」
散々わめいていたベレ○だが、途中からその声は聞こえなくなっていた・・・
「ふう・・・ボロボロだなぁ・・・へへへ・・・」
何時間も犯され続け、頭の中が真っ白になっている。
「気持ちよかったし、復讐も果たせた・・・いい気分だぜ・・・」
精液まみれのベレ○の顔を拭きながら男が言う。
「これからは俺の奴隷として、たっぷり可愛がってやるからなあ・・・」
こうしてベレ○は男の相手をし続けることになるのだった・・・

「くっ・・・この程度の拘束・・・
戦いに敗北し、メギドラ○に連れて行かれたブ○。
「無駄無駄　その非力な肉体で我々から逃れれるとでも？
彼女を捕らえたメギ○の声が耳に響く。
「も・・・目的は・・・なんだ！！　あとスカートを戻せ！！
いつの間にか捲り上げられたミニスカートから純白の下着が姿を見せている。
ギシッ
ギシッ
しっ
しれっ
ピラ！
ピラ！

「追放刑じゃ物足りなかったかな、もう少し痛めつけてやらないとね くっくっく
楽しそうに笑うメギ⊙。
「ひょっとしたら気持ちよくなってしまうかもしれないんだけど その肉体だとね
そのメギ⊙はそう言うとヴィー⊙の肉体に姿を変えた。
「な・・・なにを・・・まさか・・・
ブ⊙の顔色が変わっていく・・・
「お・・・男・・・き・・・貴様っ!!
ヴィー⊙の男の姿と化したそのメギ⊙睨み付けるブ⊙。
つまりこのメギ⊙は少女の肉体となった自分を陵辱するつもりなのだ・・・

「な・・・なんだこれは・・・パンツに何を当てて・・・」
ブ○の下着にそのメギ○の肉棒があてがわれる。
メギ○自体に生殖という概念はないが、今のブ○の肉体はメギ○のそれではない・・・
「くっ・・・くそ・・・や・・・やめ・・・」
そう、追放されヴィー○の肉体となったブ○は
魂こそメギ○ではあるがその肉体はヴィー○の「女」でもあるのだ・・・

「はぁはぁ・・・なるほど・・・これは確かに・・・」
下着に触れている肉棒から今まで感じたことのない心地よさを感じるメギ○。
「うう・・・や・・・・やめてくれ・・・」
男の肉体となったメギ○を睨み付けるブ○。
その体を必死に揺らしながら肉棒の接触から逃れようとする。
「はぁはぁ・・・こ・・・擦れたときに頭に突き刺さるような快楽・・・」
ぽたぽたと涎をたらす男。
とはいえこの行為はまだ本当の快楽を得る段階ではない・・・
「た・・・たしか・・・この割れ目にぶち込むんだったよな・・・ふふ・・・」
男の手がブ○の下着に伸びてゆく・・・

「ひゃああん!! だめええっ!!」
ずぶずぶと男の肉棒がブ○の割れ目に挿入されていく…。
「こ・・この感触は・・・な・・・なんだ!!」
ブ○の女性器が肉棒をぎゅっと締め付けてくる。
「やめてええっ!! 抜いてええええっ!!」
男の肉棒に貫かれ、ブ○がヴィー○の女の声で叫ぶ。

「あっ・・・あんっ・・・こ・・・こんなの・・・」
行為に女の肉体が反応し、ブ○が甘い声を出し始める。
「はぁはぁ・・・これは・・・ヴィー○の数が増えるわけだぜ・・・」
ゆさゆさと男が腰を振り、そのたびにくちゅくちゅと卑猥な音が漏れる。
「あんっ！！ 抜いてっ！！ こんなのっ！！ あああっ！！」
メギ○とは思えないような乱れた声を出すブ○。

「あん！！　ああん！！　もう・・・やめて・・・お願い・・・」
女の快楽がメギ○の魂を覆っていく・・・
「ああ？　そんな声出して何言ってんだ？　それがメギ○の声かよ！！」
さらに激しく腰を振りながら男が言う。
男のほうもメギ○が本来感じることのない快楽に酔っている。
「はぁはぁ・・・な・・・なんかおかしいぜ・・・なにかが・・・で・・・出る！！」
男の肉棒が限界に達し、白く濁った液体がブ○の膣内に放出され始めた・・・

「いやあああああっ！！　だ・・・ださないでええっ！！」
どぴゅどぴゅと音を立てながらブ○の膣内に精液が注がれていく・・・
「おお！！　こ・・・これが射精ってやつか！！　すげえ快楽だぜ！！」
初めての射精の気持ちよさに思わず声を張り上げる。
「な・・・中は・・・・お願いだ！！　中に出すのはああっ！！」
叫び散らすブ○。
「へへ・・・しっかり刑罰になっているようだな！！」
満足げな笑みを浮かべながら男は最後の一滴までその精液を注ぎ込んでいく・・・

「ふう・・・気持ちよかったぜ・・・こりゃあたまらん・・・」
満足そうに息を吐き、呼吸を整える。
「な・・・中に・・・だ・・・出したのか・・・」
悔しそうな声で問いかけるブ○。
「しっかりヴィー○の肉体を模したんだぜ？ てめえの肉体が孕む様にな！！」
楽しそうな笑い声が響く。
「さーてまだまだ刑罰は終わったわけじゃねえからな！！ たっぷり可愛がってやるぜ！！」

「はぁ・・・はぁ・・・お願い・・・もう・・・」
数十時間たっぷりと犯され肉体の限界に達したブ⊙。
「ふう・・・こっちも限界だぜ・・・」
ゆっくりと肉棒が引き抜かれどぷどぷと精液が溢れ出す。
「こりゃあ気に入ったぜ・・・ただの暴力とは違う快楽、興奮・・・俺だけのモノにしたら追放されちまいかねねえな・・・」
翌日ブ⊙の周りには何人ものヴィー⊙の男の姿のメギ⊙たちが集っていた。
こうして捕らわれたブ⊙はメギ⊙たちの快楽の道具にされてしまうのだった・・・

ジュル
ジュル
ジュル
ジュル
ジュル
ジュル
ジュル
ジュル
あっ♡
あっ♡
「あああっ!!! 今日もまた楽しませてくれるのか!!」
それは本来、刑罰のはずだった・・・幻獣を用いての陵辱・・・
だが、フルカ○はその幻獣との行為を愉しみ出してしまったのだ・・・
「早く気持ちよくさせろ!! 痛めつけて殺すぞ!!」
幻獣の触手に自らその肉体を委ねるフルカ○。
「なあ・・・これ・・・刑罰・・・なんだよな・・・」
泣き叫んだウェパ○とは全く違う反応に刑を執行する側のメギ○が戸惑いを見せる。

「んんっ！！　しっかり私の体を弄ぶんだぞ！！」
触手がフルカ⊙の肉体に絡みつき、宙に持ち上げる。
「さ・・・さて・・・今日も貴様には陵辱刑がまっているわけだが・・・」
宙に持ち上げたフルカ⊙を見上げながらメギ⊙が呟く。
「ああ！！　わかっている！！　早くしろ！！　貴様も殺すぞ！！」
大きな両胸を自らの手で揉みながら笑みを浮かべるフルカ⊙。
ぬル
ん～♡
ビクン
ビクン
ん～ん～♡
ビクン
ビクン
ヌル
ヌル
じん～
じん～
ヌル

メギ○の指示で触手がフルカ○のストッキングを引き裂く。
「もういいだろう・・・早く・・・しろ!!」
期待のこもった眼差しでメギ○を見つめるフルカ○。
「ちっ・・・こいつのヴィー○脳は壊れてんのかよ・・・」
果たして陵辱することが刑罰になっているのかどうか・・・
そういった疑問は確かにあるのだが、刑を執行しないわけには行かない・・・
「もういい!! さっさと犯せ!! 貫け!!」
メギ○の指示で触手がフルカ○の女性器を貫いていく・・・

「あぁんっ!! はいってきてるぞ!!」
ずぶずぶと触手がフルカ⊙の狭い膣内に入り込んでいく。
「もっと!! もっと奥まで!! ちゃんと犯せ!!」
触手の行為を求めて叫び、両胸を揉む己の腕に力を込めるフルカ⊙。
「。。。。。。。。。」
そして複雑な気持ちでそれを眺めるメギ⊙。

「あああっ・・・まだだ・・・もっとしっかり犯せ！！」
物足りなさそうな顔で執行役のメギ○を見つめるフルカ○。
「完全に脳が壊れてるんじゃねえのかてめえ・・・何されてるかわかってんのか？」
あきれたような声で問いかけるメギ○。
「十分に理解している！！　この程度では心地よいだけで苦痛でもなんでもないぞ！！」
己の乳房を弄びながらフルカ○が不満をぶちまける。

「そらよ！！ これでどうだ？ ちょっとは屈辱を感じるか？」
先ほどより激しく触手が動き、フルカ⊙の肉体を弄ぶ。
「んんっ！！ そこ・・・そこだ！！ もっと！！ もっとだ！！」
愉しそうに腰を前後に振るフルカ⊙。
「ちっ・・・快楽に酔ってやがる・・・なら完全に頭を焼ききってやる！！」
メギ⊙はそう言うと幻獣に過剰ともいえるフォトンを注入しはじめた。
ぷっ
ぷっ
ぷっ

「おおおんっ！！　ここっ！！　ここわおおっ！！」

くちゅくちゅと激しい音を立てながら触手がフルカ○の膣内を激しく蹂躙する。

ヴィー○女の肉体がその行為に悦び、本能のまま甘い声で鳴くフルカ○。

「そらそら！！　もっと乱れろ！！　頭の中が灰になるまで犯せ！！」

本来は屈辱を与える刑のはずだったのだが・・・

「おんっ！！　おおお～んっ！！　すごいの！！　頭が真っ白になってええ！！」

交尾する快楽を与えるだけの刑になってしまっている・・・

「ほお！！　一緒にイこう！！　中に・・・中に出せっ！！」

フルカ○の絶頂と同時に触手がその膣内にどくどくと精液を注ぎ始めるのだった・・・

おんっ♥
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

「あああっ！！　あつい！！　だ・・・出されっ！！」
どぴゅどぴゅと白く濁った液体がフルカ⊙の膣内に注がれていく。
「そらそら！！　どんな気分だよ？　孕むかも知れねえぞっ！！」
少しでも屈辱を与えようとメギ⊙が声を張り上げる。
だがフルカ⊙にその脅しは意味を成さなかった。
「はぁ・・・はぁ・・・良い・・・気分だぞ・・・」
以前の肉体では味わうことのなかった心地よさを堪能するフルカ⊙。

「はぁ・・・ふふふ・・・」
どぷどぷと結合部から精液が溢れ出している。
「へへ・・・だらしない顔しやがって・・・」
だらりと舌を出したフルカ⊙の表情を見つめながらメギ⊙が言う。
「はぁはぁ・・・こ・・・これで終わりか？」
荒い息遣いのままメギ⊙に視線を送るフルカ⊙。
「その顔で生意気いってんじゃねえぞ！！　おら！！　覚悟しろよ！！」
メギ⊙はそう言うと幻獣に再び大量のフォトンを送り込んだ・・・
はぁ♥
はぁ♥
ドプッ
ドプッ
ドプッ
ドプッ

「くそっ！！　まだ壊れないのかよ！！　なんて奴だ！！」
幻獣に供給するフォトンが尽きてしまったのか、触手から色艶がなくなっている。
「ふふふ・・・私の勝ちだな！！　なかなかの強敵だったぞ！！」
動きすらも停止したのを確認し、勝ち誇ったような笑みを浮かべるフルカ○。
「じかし敵を討ち滅ぼすだけが快楽ではないな！！　この肉体には感謝せねばな！！」
不敵な笑みを浮かべ触手の拘束を解くフルカ○。
「さあ次だ！！　次の獲物をつれて来い！！　打ち負かしてやる！！」
こうしてフルカ○は様々な幻獣との「戦い」を堪能するのであった・・・

「やだあああ！！　助けてもんも⊙！！　犯されちゃう！！」
男たちに捕まり助けを求め叫ぶシャック⊙。
両手を縛られ、ミニスカートを捲り上げられてしまっている。
「ああ？　誰がてめえみたいな不幸を呼ぶメギ⊙を助けに来るんだよ？」
「そのヴィー⊙女の脳みそ、足りてねえのか？　ああ？」
男たちはシャック⊙の不幸体質の巻き添えになり、追放されたメギ⊙であった・・・

「うう・・・本気でする気なの？」
男の肉棒がシャック⊙の下着に触れる。
「そりゃそうだ！！　てめえのせいで・・・だから！！　せめて！！」
肉棒が下着にこすり付けられ、前後に動き始める・・・
「はぁはぁ・・・全く・・・性行為ってやつはよぉ・・・」
「俺はメギ⊙だぜ・・・でも・・・くそ・・・きもちいいぜ・・・」
男はそう言うとシャック⊙の下着の上に思い切り精液を放出していった・・・

「や・・・やだあああああああっ！！ 出されてるよぉ！！」
白く濁った液体がシャック⊙の下着やミニスカートに向けてぶちまけられていく。
「ふう・・・いい気分だぜ・・・これは不幸では・・・ないな・・・」
恨みと欲望が詰まった精液を解き放ちながら男が呟く。
「不幸だよぉ！！ もんもー⊙！！ 召喚して助けてええ！！」
その叫びは空しく響くだけであった・・・
やっ
やだあっ！！
ドピュ
ドピュ
ドピュ
ドピュ
ガシッ

「うう・・・ぱんつが汚れちゃってるよぉ・・・」
気持悪さに顔をしかめるシャック⊙。
「いい眺めじゃねえか　この体だからこそ・・・感じることだろうが・・・」
男の肉棒が再び硬くなっていく・・・
「や・・・やだ・・・ぱんつの上でまた硬く・・・」
怯えた声でつぶやくシャック⊙。
「いい顔してんじゃねえか！！　覚悟しろよシャック⊙！！」
男はそう言うとシャック⊙の下着を横にずらし、露になったその性器を貫いていった・・・
うっ。
ぱんつが・・・
ぺとっ
ぺとっ
ぺとっ
ぐぃっ
ずぷ…
ずぷ…

「あああああんっ！！　いたいいいっ！！　やめてええっ！！」
ゆっくりと男の肉棒がシャック⊙の膣内に入り込んでいく・・・
「ふう・・・せ・・・せま・・・いな・・・」
狭い膣内に戸惑いながら、少しずつ奥まで肉棒をねじ込んでいく・・・
「やだあああっ！！　たすけてええっ！！　もんも⊙！！　早く召喚してええ！！」
叫び散らすシャック⊙だが、その声が届くことはなかった・・・

「うぅ・・・ひどいよ・・・不幸だよぉ・・・」
必死に痛みに耐えるシャック☉。
「ふぅ・・・はぁ・・・こっちはいい気分だぜぇ・・・」
ゆっくりと腰を振りながら男が言う。
「てめえの不幸体質に巻き込まれた挙句に追放されちまったが・・・」
男の口からぽたぽたとよだれがこぼれ落ちる。
「今は悪くない気分だぜぇ・・・そらそら!!」
徐々に男の動きが激しくなっていく・・・
ぴぴぴ
ぷっ♥
ぷっ♥
ぷっ♥

「はぁ・・・ああんん・・・なんか・・・体が・・・」
少しずつ快楽を感じ始めているシャック⊙。
「へへ・・・気持ちよくなってんだな・・・この体はそういう風にできているんだぜ・・・」
男の大きな腹がシャック⊙を突くたびにポヨンと揺れる。
「あっ・・・ああああん!! だめええっ!! なんだかおかしく・・・」
シャック⊙の頭が真っ白になっていく・・・
「はぁはぁはぁ!! 俺も限界だ!! いくぜ!! 孕んでしまえ!!」
男はそう言うとシャック⊙の膣内に精液を放出していった・・・

「あああんんっ!! 中にっ!! いっぱい中に出てるっ!!」
どくどくと濃厚な精液がシャック⊙の膣内に注がれていく…
「やだあああ…やだぁぁ…」
悲痛な声が男たちを満足させていく…
「へへ…こっちも一発…」
「今は精液を呼ぶメギ⊙だな!! そらよ!!」
周りの男たちもシャック⊙に向けて精液を解き放っていった…
ビクッ
ガッ
ドピュ
ガッ
ガッ
中にっ!!
ドピュ
ドピュ
ドピュ
ドピュ
ドピュ
ビクッ
ドピュ
ドピュ
ドピュ

「うう・・・本当に生で・・・やられちゃった・・・」
とぷとぷと結合部から精液があふれ出している。
「も・・・もう・・・許してよぉ・・・気持ちよかったんでしょ？」
嘆願するように声を出すシャック⊙。
体にぶちまけられた精液も異様な臭気を放ちシャック⊙の心に恐怖を刻んでいる。
「ああ？　こんな気持ちいいこと・・・そう簡単にやめるわけねだろ！！」
男はそう言うとシャック⊙を抱きかかえた・・・
うぅ…
生で…
やられ…
ベトッ
ドロッ
ベトッ
ベトッ
ベトッ
トプ
トプ
ドロッ
良かったぜ…
はぁ…

はぁ
はぁ
うぅ
ドクン
くさい…
ドクン
「おら！！　まだまだ終わらねえぜ！！」
男の体の上に無理矢理跨らせられるシャック。
「今度は口でもするんだぞ！！」
男がシャック○の頭を掴み、その口元に肉棒を近づける。
「く・・・くさい・・・口で・・・なんて・・・」
異臭がシャック○の嗅覚を襲い、思わず目を背ける。
「おとなしく咥えろよ！！　痛い目見るぜ？」
拳を突きつけられ観念したのか、シャックの口がゆっくりと開いていく・・・
はぁ
はぁ
スリ
スリ

はぁ
はぁ
はぁ
ガシッ
んっ
ジュプ
ジュプ
んぐっ
ぷる
ぷる
「(んんっ!! んぐっ・・・)」
開かれたシャック○の口内に肉棒が入っていく・・・
「へへ・・・やっぱレイプってのは口も使わねえとな!!」
男がシャック○の頭を掴み、前後に揺らし始める。
「味わえ味わえ!! この肉棒はてめえのせいで誕生したんだぜ!!」
男の怒りと欲望を乗せた肉棒がシャック○の口内を蹂躙していく・・・

「(やだぁ・・・もんも○・・・たすけてぇ・・・)」
程なくしてシャック○の口が唾液で満たされていく・・・
肉棒が口に含まれているからか、異常な量の唾液が口内に分泌されている。
「へへ・・・唾液でぐちょぐちょだな・・・いいぜぇ・・・」
男が気持ちよさそうに呟く。
「じゃあそろそろ・・・出すぜ!!味わってくれよ!!」
その言葉と同時にシャック○の口内に大量の精液が放出され始めた・・・

イイビッ!!
ドピュ
ドピュ
ドピュ
ドピュ
ん…!!
「(いやあああ・・・く・・・口の・・・中に・・・)」
どくどくと精液がシャック○の口内に注がれていく・・・
「ふう・・・へへへ・・・追放されて一個だけ良かったのは・・・」
男がシャック○の頭を撫でながら言う。
「この性交の気持ちよさだな!! へへへ・・・」
「ああ・・・それだけは同意できるなぁ・・・ひひひ・・・」
男たちが不気味な声で笑う。

「はぁはぁ・・・げほげほ・・・」
シャック○の口からどぷどぷと精液が垂れ落ちている。
「へへ・・・いっぱい出してやったぜぇ・・・」
男が呼吸を整える。
「さて・・・そろそろもう一回中に入れるぜ!! そら!!」
シャック○を跨らせている男の肉棒が硬くなっていく・・・
「え・・・こ・・・この状態で・・・い・・・いれるの・・・?」
シャック○の恐怖をよそに男はその下着に手を伸ばしていった・・・

「あっ・・・ま・・・また・・・中・・・につ・・・」
ずぶっと男の肉棒がシャック〇の膣内に挿入される。
「ふう・・・この体勢だからな・・・奥まで届いてるな・・・」
男がシャック〇のお尻をさすりながら言う。
「う・・・動かないで・・・あ・・・あたって・・・」
奥まで挿入された肉棒が容赦なくシャック〇の膣内を責め始める。
さっき犯された余韻があるからか、程なくしてその体は男の行為に反応してく・・・

あっ
はっ はっ
あああっ
あん
プル
プル
「あっ・・・あああん・・・もんも○・・・」
シャック○の口から甘い吐息が漏れる。
「なんで・・・こんなに気持ちいいのぉ・・・？」
とろりとした目で男を見つめるシャック○。
「へへ・・・てめえの体重のせいだな・・・こりゃいいぜ！！」
男はそう言うとシャック○の体を激しく上下に動かし始めた。
しゃぁ
しゃぁ
ガシッ
スプッ♥
スプッ♥
スプッ♥

ぶっ
ジュプ♥
ジュプ♥
ぶっ
「(んん!! は・・・はげし・・・すぎ・・・だめぇ・・・)」
再び口を肉棒で塞がれ、息が苦しくなるシャック⊙。
「はぁ!! はぁ!! いいぜ!! いいぜええ!!」
下の口から襲い掛かる快楽に抗おうとするが、
酸素が足りないのか頭がボーっとしてしまい、気持ちよくされてしまっている。
「(だめ・・・だめぇ・・・あたまが・・・まっしろ・・・)」
シャック⊙が絶頂に達する。
その瞬間どくどくと男たちの精液がシャック⊙の穴に解き放たれていった・・・
ぱんっ
スプッ♥
スプッ♥
スプッ♥
スプッ♥
ぱんっ

ブルー ブルー
あ…
ドピュ
ドピュ
ドピュ
ドピュ
すごい…
ドピュ
ビクッ
ビクッ
ドピュ
ドピュ
ドピュ
「(あ・・・ま・・・また・・・中に精液・・・)」
再び大量の精液に襲われるシャック⊙。
「ははは!! いい顔してるじゃねえか!!」
「イきまくってたんだろぉ!! わかるぜ!! この穴すごかったからなあ!!」
あっという間にシャック⊙の上下の口が白濁液で満たされていく・・・
「(す・・・すごい・・・量・・・あ・・・赤ちゃんできちゃうのかな・・・)」
飛びそうな意識の中、最悪の結果がシャック⊙の頭の中に浮かんでいく・・・

「げほっ・・・・げほっ・・・」
口から肉棒が引き抜かれ、どぷどぷと精液がこぼれ出す。
「ふう・・・出した出した・・・」
「ああ・・・こっちの穴にもたっぷりだぜ・・・へへへ・・・」
下の口からもどぷどぷと精液があふれている。
「さーてと・・・こっからはフォトンをつかってもっと激しくいくぜ!!」
「精液体質に改められる程度には可愛がってやるからな!!」
男たちはそう言うと徹底的にシャック⊙の体を弄んでいくのだった・・・

「げふ・・・げほ・・・はぁ・・・はぁ・・・」
男たちに休む間もなく突っ込まれ続けたシャック⊙。
全身が精液で汚されており、焦点の定まらない目で男たちを見ている。
「ふう・・・何日たった？　まだ12時間くらいか？」
「フォトンも枯渇してきたし・・・これ以上犯ってぶっ壊すのももったいねえよな」
「復讐のつもりがすげえ気持ちよくてよぉ・・・愛が芽生えちゃったかも？」
この数時間後、シャック⊙はソロモ⊙に召喚され、救出されることになるのだが
時々キノコを下の口に突っ込もうとする性癖に目覚めてしまったという・・・

ガシッ
は。
ガシッ
放してっ!!
「は・・・放してっ!!」
メギ○たちに捕獲されたストラ○。
「私は・・・私は普通の女の子として生きたいだけなのに・・・」
ストラ○がメギ○を睨み付ける。
「では普通の女の子が最も嫌がる刑に処して差し上げましょう・・・」
その言葉と同時に男たちに押し倒されるストラ○。
「ふふ・・・この娘を可愛がってあげなさい・・・好きなだけ」
少女にとって最も残酷な刑が始まるのだった・・・
ガバッ

ぐぁ
ぐぁ
どぐぅぅ・・・
ぐぁ
ぐぁ
「はぁはぁ・・・ストラ○ちゃん・・・ふひひ・・・」
男たちはよく見ると何度か張り倒したことのあるチンピラだった・・・
だが以前よりもずっと力が強くなっている・・・
「ど・・・どうして・・・」
戸惑うストラ○。
「ちょこっと改造を受けましてねえ！！いままでのこと・・・」
男が目の前で勃起した己の肉棒をしごき出す。
「水じゃなくて精液で洗い流してあげるからね！！」
男はそう言うとストラ○の下着に向けて精液を解き放っていった・・・
ドクン
ドクン

やめ
いやぁっ!!
「やめてええっ!! かけないでええええっ!!」
どぴゅどぴゅと白濁液がストラ○の下半身にぶちまけられていく・・・
「誰がやめるかよっ!! そらそら!!」
恨みを晴らすかのように大量の精液が飛び散っていく・・・
「いやあああっ!! 汚いっ!! お願いやめさせてええっ!!」
メギ○に嘆願するように叫ぶストラ○。
「そんな甘えた発言をするなんて・・・ヴィー○女の脳はどうなっているんでしょうか」
くすくすと不気味な笑い声を上げるメギ○。
ドピュ
ドピュ
ドピュ

「うう・・・ぺ・・・ぺとぺと・・・してる・・・」
汚されたスカートの中を見つめながら悔しそうに呟くストラ○。
「ふう・・・気持ちいい射精だったぜ・・・」
息を整え、満足そうな笑みを浮かべる男。
「さあ休んでないでもっと可愛がってあげなさい！！」
メギ○が間髪いれずに男に指示を出す。
「だってよぉ・・・いやあ！！　仕方ないよなあ！！」
男が上辺だけの言い訳を連ねながらストラ○の下着に手を伸ばす。

ビクッ
ギュッ
ガッガッ
ギュッ
ヤッガッ!!
ビクッ
ビクッ
ズブブッ
ブチッ
ブチッ
「俺だって言うことを聞かないとどうなるかなああ！！　だからよぉ！！」
ゆっくりとストラ○を純潔を奪いながら男の肉棒がその膣内に進入していく。
「いやあああっ！！　ぬ・・・抜いてええっ！！」
必死に手足をばたつかせ男の行為に抗おうとするストラ○。
「ふふふ・・・本当に普通の女の子に見えてきましたよ・・・」
男に蹂躙されていくストラ○の姿を見つめながらメギ○が不気味な声で笑う。
「メギ○があげていい声では　ありませんよねえ・・・」

ぴっ
ぴっ
ぷっ
ぷるっ
ぷるっ
ぷっ
ぷっ
「ううう・・・あああ・・・この体・・・どうして・・・」
男の行為に徐々にストラ○の体が応え始めていく・・・
「はぁはぁ・・・いい感じになってんだろ？　おめえもよぉ！！」
ストラ○の胸を舐め、男が楽しそうにストラ○を責める。
「うう・・・そんなわけ・・・ああっ！！」
必死に快楽に抗おうとするストラ○。
「物足りないらしいですよ？　もっと男を見せて差し上げなさい」
メギ○が男をさらに炊きつけて行く・・・

ぎゅ
あんっ。
あんっ。
ぎゅ
あぁんっ。
たゆ
たゆ
「あんっ!! あああんっ!! や・・・やだああっ!!」
我慢の限界を超えて甘い声であえぎ始めるストラ○。
「はぁっ!! はぁっ!! こんなに良かったんだなおまえ!!」
男が力いっぱい腰を振り、ストラ○の奥を突く。
「こ・・・こんなチンピラに・・・ああああっ!! いやあああっ!!」
悔しそうに泣き叫ぶストラ○。
「だ・・・だめだ・・・もう・・・で・・・出る・・・出るううっ!!」
男はそう言うとストラ○の膣内にどくどくと精液を注いでいくのだった・・・
ずプッ♥
ずプッ♥
ずプッ♥
ずプッ♥

「あああああっ!! だ・・・ださないでええっ!!」
すさまじい勢いでストラ○の膣内を精液が満たしていく・・・
「おおおっ!! 中に・・・中に出てるぜええっ!!」
男が獣のような雄たけびを上げる。
「おやおや・・・情けない声を出して・・・」
だらりと舌を出しているストラ○にメギ○が冷たく言い放つ
「じかし気持ちよくさせることが刑として成立しているのでしょうかねえ・・・」

ピク…
ピク…
ピク…
ヘヘ…
う…
ひどい…
ヤバ…
「さて・・・なにやら気持ちよくなっていたみたいですが・・・」
メギ○がストラ○に話しかける。
「うう・・・ひどい・・・私は・・・普通に誰かと・・・」
とろりと精液が結合部からたれ落ちる。
「ああ、どうやら快楽よりも嫌悪感のほうが勝っているようですね　では・・・」
メギ○はそう言うとさらに何人もの改造ヴィー○たちを連れて来るのだった・・・
「たっぷりと　可愛がって差し上げなさい・・・」
ベトッ
トプン
トプン
はぁ…
はぁ…
ベトッ

「はぁ・・・はぁ・・・だ・・・だめぇ・・・」
何人もの男に突っ込まれ、ストラ○は精液まみれになっていた・・・
「ふう・・・ぼろぼろにしちまったかぁ・・・へへへ・・・」
びくびくと痙攣するストラ○を見つめながら男が笑みを浮かべる。
「ふふ・・・本当に普通の女子みたいじゃないですか・・・」
無残なストラ○にメギ○が話しかける。
「この先も私の手下の改ヴィー○たちのお相手を、頼みますね？」
こうしてストラ○は男たちの慰み者として処理されるのであった・・・

「くっ・・・サルガダナ○！！　何をっ！！」
サルガダナ○に敗北したウェパ○は彼女の所有する幻獣に拘束されてしまっていた。
「これ・・・幻獣！？　体に絡まって・・・・あっ・・・」
幻獣の触手がウェパ○のミニスカートをひらりと捲り上げる。
「や・・・やめっ・・・スカート・・・このぉ・・・」
ストッキング越しに露になっている下着に視線を赤らめるウェパ○。
「あら・・・すごい顔ね・・・そんなに恥ずかしいのかしら？　だったら・・・」
サルガダナ○が指をぱちんと鳴らした・・・
くっ
くそっ!!
ギュッ
ギュッ
ズル
ズル
ガバッ
ガバッ
ズル
ズル
ズル
ズル

「あっ!! ・・・いやああっ!! やめろおおお!!」
幻獣の触手が鞭のようにウェパ○の捲り上げられたミニスカートの中を責め始める。
「ふん・・・裏切って敗北した身でなにがやめろよ? 通るわけないでしょ?」
触手がウェパ○のストッキングをびりびりと引き裂いていく・・・
「しかも、ヴィー○の男に、恋? 馬鹿げてるわ」
ウェパ○の足と下着を覆い隠していた黒い布地が消えていく・・・

「いやあああっ！　やめてええっ！！」
ウェパ⊙のストッキングが引き裂かれ白く綺麗な肌と下着が露出する。
「みっともない声ね、そんなに恥ずかしいのかしら？」
露になった下着に視線を送るサルガダナ⊙。
「ま、あなたの今の脳だと、そう感じるってことなのね」
不思議そうな顔でウェパ⊙を見下すサルガダナ⊙。
やめてっ!!
ぬあ。
ぬあ。
ギュッ
ギュッ
ボロ…
ボロ…
ギュッ
ギュッ

「うう・・・も・・・もういいでしょ・・・私にこんな声まで出させたんだし・・・」
サルガダナ⊙の顔を直視できず、目をそらしながらウェパ⊙が呟く。
「ふん・・・こんな程度で腹の虫が収まるなら誰も苦労はしないわ」
サルガダナ⊙が幻獣の触手を操り始める。
「私の知る限り、その脳が最も嫌悪する行為を以って、痛めつけてあげる」
サルガダナ⊙はそう言うと幻獣の太い触手をウェパ⊙の膣内に無理やりねじ込んでいった・・・
う・・・
う・・・?
ヌル
ヌル
ヌル
ヌル
ヌル
ヌル
じん
じん

「あああっ！！
や・・・やだあああっ！！」
ウェパ⊙の絶叫がメギドラ⊙の暗い空間に響き渡る。
「すごい声ね・・・そんなになの？」
叫び散らすウェパ⊙を見下すようにサルガダナ⊙が言う。
「だ・・・だめええっ！！ やめてええっ！！ ぬ・・・抜いてええええっ！！」
ずぶずぶとウェパ⊙の中に触手が入り込んでいく・・・
ビクッ
あっ
あっ
ビクッ
ビクッ
ズブブッ
ズブブッ

「あっ・・・あん・・・な・・・中に・・・」
膣内に異物が入り込んでいる・・・未知の感覚がウェパ○を襲う。
「い・・・いや・・・抜いて・・・お願い・・・私は・・・彼の・・・」
なぜだかわからないがこの行為をされたことが申し訳ないことのように思えてくる・・・
「恋なんてするからよ。ま、裏切りの代償よ、これは」
サルガダナ○はそう言うとウェパ○を犯すために幻獣にフォトンを注いでいった・・・

「あっ・・・あんっ!! や・・・やだぁっ!!」
可愛らしい声を漏らし始めるウェパ〇。
「ふふ・・・交尾と言うらしいわよ この行為」
幻獣にフォトンを注入しながら笑うサルガダナ〇。
「本来意中の異性と行うらしいんだけど、ごめんなさいね」
クスクスと笑うサルガダナ〇。
「相手がこんな化け物で!!」
その言葉には裏切られた怒りがしっかりと宿っていた・・・
じぃ…
じぃ…
あぁん
やだぁ
やだぁ
ヌル
ヌル
ヌル
ヌル
ズブッ
ヌプッ♥
ヌプッ♥
ズブッ
ヌル
ヌル
ヌル

「あっ・・・だ・・・だめ・・・」
激しい責めに抗えず、快楽の波に飲まれそうになるウェパ○。
「は・・・はげし・・・すぎて・・・あたま・・・が・・・」
ウェパ○の頭の中が真っ白になっていく・・・
「なるほど・・・メギ○の魂を以ってしても快楽には抗えないのかしらね」
涎をたらしながら喘ぐウェパ○を見つめるサルガダナ○。
「最後まで行ったとき、どうなるのかしら・・・」
サルガダナ○がそう思ったとき、幻獣の触手の先端から精液と同様の液体が放出されていった・・・

「いやあああああっ!! 中に・・・中に出てるうっ!!」
だらりと舌をたらしウェパ○が叫ぶ。
「あらら・・・すごい量ね・・・」
ウェパ○の膣内にどぷどぷと大量の精液が注がれ、あっという間に逆流し始めている。
「そして、この声、この表情・・・よっぽど気持ちよかったのね」
見下すような感情と好奇心の入り混じった瞳でウェパ○を見つめるサルガダナ○。
ドピュ
ドピュ
ドピュ

「うう・・・ちくしょう・・・ちくしょう・・・」
悔しさに唇をかみながら悪態をつくウェパ○。
「ずいぶんと悔しそうね・・・私も悔しいんだけどねあなたに裏切られて」
サルガダナ○の手がウェパ○の頬に触れる。
「でも気持ちよかったんでしょ？　ついさっきまで、あんあん鳴いてたじゃない甘い声で」
気持ちよくされてしまったことがより一層悔しさを加速させてるのだろう・・・
「だからもう少しだけ、可愛がってあげる」
サルガダナ○はそう言うとウェパ○を幻獣から開放し、そして・・・
ちくしょう・・・
ぬっく・・・
ぬっく・・・
ぬル
ぬル
ぬル

「うう・・・な・・・なんのつもり・・・今度は・・・」
幻獣から解放されたウエパ○。だが・・・
「見てわからない？　あなたの大好きなヴィー○男よ？　別の個体だけどね」
今度はヴィー○の男性がけしかけられていた・・・
「あなたにちゃんとした異性との交尾と言うものも体験させてあげたくてね？」
サルガダナ○がにやりと笑う。
「な・・・いや・・・やめ・・・ああああっ！！」
正真正銘の肉棒がウエパ○の肉体に襲い掛かる・・・
はぁ
はぁ
う・・・
今度は・・・
なに・・・
はぁ
はぁ
ガシッ
ガシッ
ガシッ
ガシッ
ズリ
ズリ
ズリ
ズリ

「あああっ！　いやあああああっ！！」
ウェパ○の膣内にずぶずぶと男の肉棒が入り込んでいく。
「あらあら、いやって事はないでしょ？　私を裏切ってまで求めたヴィー○男の肉棒よ？」
不気味な笑みを浮かべるサルガダナ○。
「それとも一本じゃ物足りないってことかしら？」
サルガダナ○がそう言うと、もう一人の男がウェパ○のもう一つの穴に肉棒をあてがった・・・
「ま、お尻のほうはさっき使わなかったから、いい体験になるかもね」

「あああああっ！！　そ・・・そっちの・・・あなは・・・」
ウェパ○のもう一つの穴に男の肉棒が入り込んでいく・・・
「ち・・・ちくしょお・・・なんで・・・こんな・・・」
目をむきながら悔しそうにわめくウェパ○
「裏切っておいてその台詞はないでしょ　たっぷり可愛がってもらいなさい」
「たっぷり・・・ね！！」

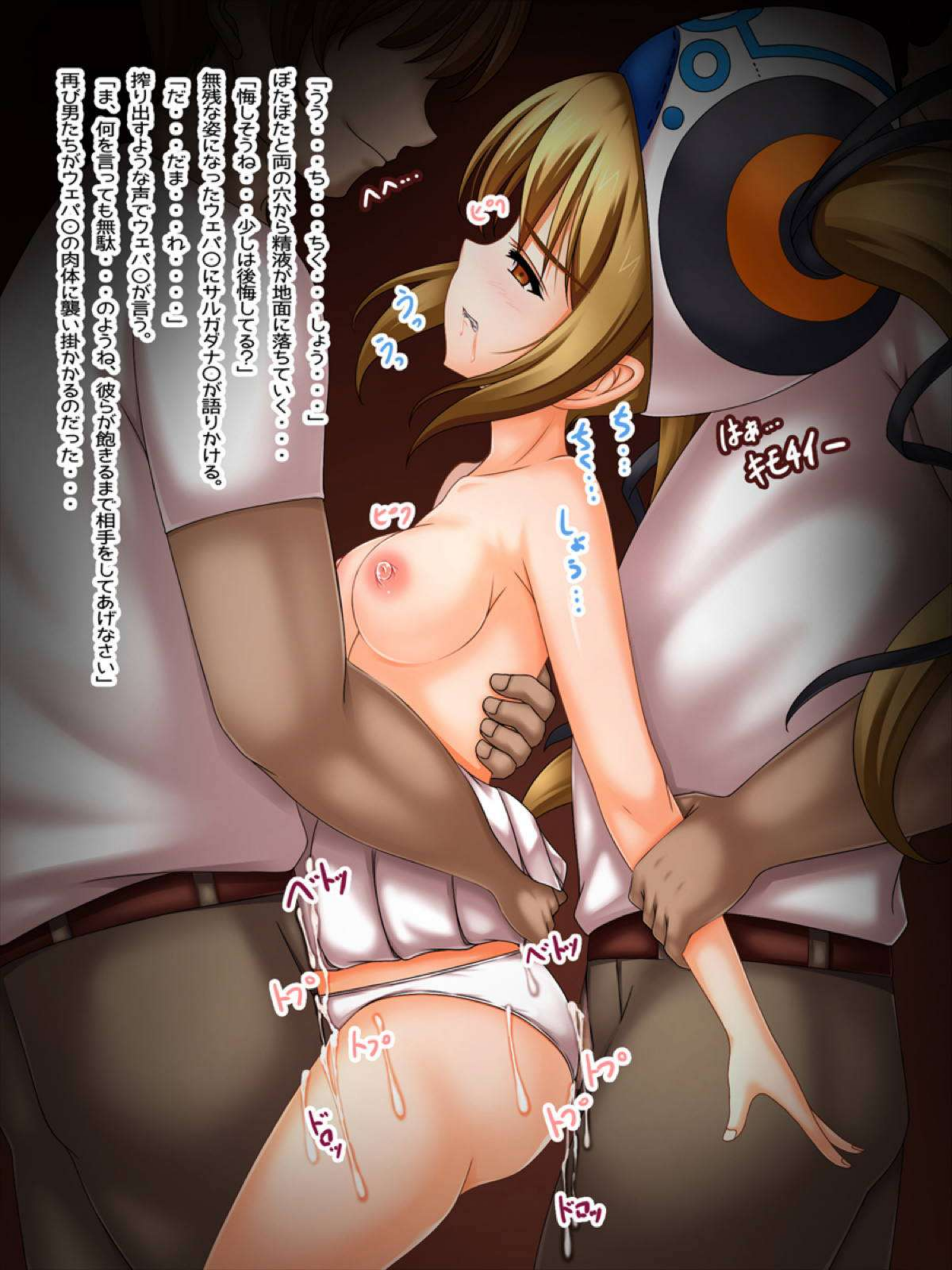
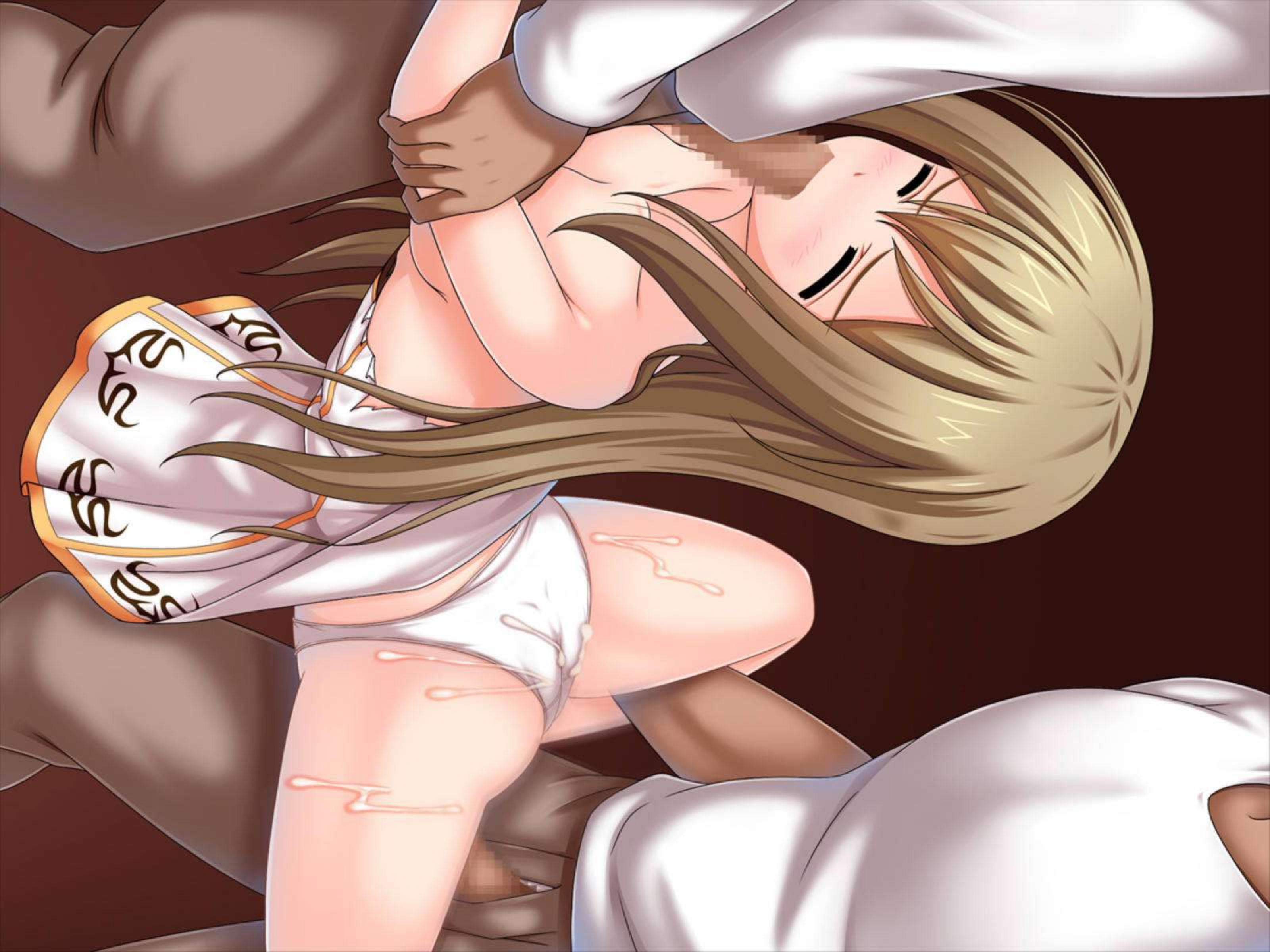
「あ・・・うう・・・ぬ・・・ぬいて・・・よ・・・」
嘆願するようにじっと男の顔を見つめるウェパ○。
「そんな顔されてもな～俺たちも無理矢理やらされてるんで？」
男がサルガダナ○の方を振り返る。
「そうよ。　しっかり働きなさい。下等生物らしく交尾に励みなさい」
行為に専念できるように言葉をかけるサルガダナ○。
「ってわけで・・・遠慮なく楽しませてもらいますね！！
う・・・
抜いて・・・
グッ
グッ
スプッ
スプッ
スプッ
スプッ

「あああっ!! ちくしょう・・・どうしてええ!!」
両足をばたつかせながらわめくウェパ○。
「はぁはぁ・・・し、仕方ないんだよ!! はぁはぁ!!」
前の男が一発突き、後ろの男が一発突く。
リズム良くぱんぱんと男の肉体がウェパ○の肉体とぶつかっていく。
「ふう・・・はぁ・・・け・・・けつも悪くねえな!!」
男たちが楽しそうにウェパ○の体を貪っていく・・・
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ああっ
ちくしょうっ!!
ビク
ビク
ずぷ
ずぷ
ずぷ
ずぷ

「ちく・・しょぉ・・・どうして・・・こんな奴らに・・・」
肉体が幻獣を相手にしたときより、明らかに悦んでいる。
一度刻まれた快楽が、頭の中を支配していく。
「ふう・・・いい感じになってきたな・・・」
「俺、もうちょっと激しくしてえんだけど」
「了解！！ んじゃぶっ壊すくらいの気持ちで行くぜ！！」
男たちの動きがさらに激しくなっていく・・・
こんな…
どっ…どうして…
ギシ
ギシ
ぱんっ
スプッ♥
スプッ♥
スプッ♥
スプッ♥
ぱんっ

「あっ あっ やだっ やめてっ こんなの・・・」
頭の中がおかしくなってしまいそうになるウェパ○。
「だ・・・だめ・・・この体・・・我慢・・・できない・・・」
はぁはぁと甘い吐息を漏らし、快楽に泳いだ目で男の顔をみつめるウェパ○。
「いい顔になってんじゃねえか!! こりゃ気持ちよくて我慢できてねえな!!」
「はぁはぁ・・・で・・・でる・・・俺も我慢・・・でき・・・ねえ・・・」
男の言葉と同時にウェパ○の両の穴にその精液が注がれていった・・・

「あああああっ!! な・・・中に・・・・また・・・精液っ!!」
どくどくとウェパ○の膣内に精液がぶちまけられていく・・・
「お尻の穴にまで・・・いやあああああっ!!」
あっという間にウェパ○の両穴が精液で満たされあふれ出していく。
「下等生物ね、本当に・・・」
呆れたように吐き捨てるサルガダナ○。


「うう・・・ち・・・ちく・・・しょう・・・」
ぽたぽたと両の穴から精液が地面に落ちていく・・・
「悔しそうね・・・少しは後悔してる？」
無残な姿になったウェパ○にサルガダナ○が語りかける。
「だ・・・だま・・・れ・・・・」
搾り出すような声でウェパ○が言う。
「ま、何を言っても無駄・・・のようね、彼らが飽きるまで相手をしてあげなさい」
再び男たちがウェパ○の肉体に襲い掛かるのだった・・・
へへ…
ピク
うっ
うっ
ちっ…
ちく…
しょう…
ピク
はぁ…キモイー
ベトッ
ベトッ
トプ
トプ
トプ
トプ
ドロッ
ドロッ

「あ・・・ああ・・・もう・・・やめ・・・」
男たちに無茶苦茶にされてしまったウェパ○。
「もうほとんど意識が無いみたいね。さて・・・」
「このままあっちに帰して、慰めてもらうのを見るのも癪ね」
「100年ほど凍結して・・・絶対に後悔させてやる!!」
なお、このときの記憶はウェパ○の中には存在していない。